



Title	Exploring a Corpus-Based Approach to English Diachronic Phonology
Author(s)	遠藤, 裕昭
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45768
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	遠 藤 裕 昭
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 18958 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 6 月 28 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	Exploring a Corpus-Based Approach to English Diachronic Phonology (電子コーパスを用いた英語音韻史研究方法の追求)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 渡部眞一郎 (副査) 教 授 岩根 久 助教授 渡辺 秀樹 摂南大学教授 今井 光規

論 文 内 容 の 要 旨

第1章 14世紀以前の英語の古音価推定の方法としては、日記・書簡等の自筆文書での綴字の癖や大まかな地域的傾向を調べる方法と、脚韻詩で脚韻語の語源同士を比較して詳細に検証する方法が組み合わせて使われる。後者の文学作品では複数の写字生が独自の綴字で記入しているため、中の綴字を考慮しても無駄であり、あくまで語源調査・比較が中心となる。後者の研究方法は客観性も認められており、百年以上にも渡って利用されているものであるが、これまで調査の結果が全て公開されたことはあまりなく、また調査結果には検索手段も用意されていないため、研究に無駄が生じることは避けられなかった。作品別にまとめられている脚韻インデックスはあるものの、ほぼ全て綴字を基準にまとめられており、綴字を対象としない音韻史研究では使いにくいものであった。そこで本学位論文の筆者は脚韻詩の電子テキストに語源情報を追加し、検索可能な電子コーパスとして研究用補助資料を作成した。電子化・組織化された資料の利用により音韻史研究に効率を導入すること、そして多数の調査結果を電子媒体上で集中管理することを提唱し、それを可能にするためのコーパスの構造と機能について本論文で議論する。

第2章 母音変化の研究で行われてきた方法を電子媒体に移植することを目指し、それを可能にするようなコーパスの構造について考察する。研究対象となる脚韻語の語源音価をアルファベットと数字の組み合わせ（検索タグ）に置き換え、それを電子テキスト内の脚韻語に一定のフォーマットで入力し、語源音価を検索対象とすることができるような形式について考察・提案した。また、その構成によってどのような検索形式が可能になるのかを論じた。その検索対象の記号構成について、検索性プログラムを視野に入れつつ解説する。

基本的にデータベースと同様にタグ付けされたテキストをフィールドとレコードに分解し、その中から目的の情報を探す、という前提でテキストファイルを構成するが、データベースと異なる点として、脚韻詩にはスキーム（脚韻行の組み合わせルール）が様々な存在し、更にそれらが同一詩に混在することもあり得るということがある。語源音価と同様、コンピュータに判断させるのは無理で、このようなことも考えながら脚韻語に加えて脚韻行自体にも行番号やスキーム文字を入れるなど、検索させる GAWK プログラムの限界を考えつつ構成しなければならない。また、該当する脚韻の検索・抽出の後でユーザーがコーパス本体にアクセスして考察する際に一助となるよう、語源情報の

詳細（注釈）を入れている。同一単語の同一形態にはなるべく同一のタグ・詳細情報が入るように考えれば、インデックスを作成する際に有用性が高まる。

第3章 タグの構造に続き、それぞれの語源音価をどのようにタグに転写するかについて、英語に語源を提供している諸言語の音韻論と関連づけながら提案する。古英語期の母音とその方言分布、後の中英語期に流入した古仏語諸方言（ノルマン方言、北部方言、中央方言）、中世低地ドイツ語、中世オランダ語などの借用語の母音音価で共通する部分をまとめて記号化し、タグと語源音価の対照を決めていく。その際に、母音だけでなく、後に母音となる子音音素についても記号化の対象とし、母音と子音の双方向変化についても記述対象となるようなタグの構成を目指す。またタグの入力の際に脚韻語の語源形を調査するにあたり、語源辞典、借用語提供言語の辞典、文法書などの記述も考慮し、それらを反映させて詳細情報を適宜入力している。

この詳細情報のうち、入力の方針に関係するものの一部を本文中で紹介し、脚韻語の語源形とタグの関係についてより詳しく紹介し、各借用元言語の母音体系について筆者がどのように考慮し、参照したかを本章で示している。

第4章 作成されたコーパスを利用して実際に音韻史研究を行い、その利用方法について検討している。例題として中英語期の前舌長母音について過去に行われた研究の中で研究の前提が問題になっている2つの研究書を取り上げ、2書が調査した脚韻詩のコーパスをタグ情報で検索して実証例とすることにした。2書がよった研究の前提は不明であるが、 \bar{a}_1 (Ash1) と呼ばれている古英語長母音音素の中英語での具現形が、長音点が上昇した形で全方言で単一になるという、これまでに提起されていない情報をより所とし、それと脚韻する単語の音価を決定している。従来の定説では上記語源音は方言により2種類の中英語音素に発達することが示されており、これまでも識者から疑問を呈されたままで、決定的な証拠/反証は提出されていない。筆者が提唱する新しい研究方法を用いて脚韻を収集し、これを調査・考察することにした。上記2書に反証を提示するためにはどのような調査結果が得られなければならないかを英語史上の知見から研究計画・仮説を立て、それを従来のように作品群を読みながらではなく既にデータベースとしてできあがっているコーパスで検索して実際の調査を行う。

仮説の検証は検索プログラムで集めた多数の脚韻例をもとに行われ、その数値を検討して当該先行研究への反証として提出した。研究方法の実際を提示するため、情報検索の段階の流れ図で示すとともに、スクリーンキャプチャー画像を入れつつ解説を試みる。古英語由来の語源音のうち、古英語 \bar{e} と \bar{a}_1 を語源音として持つ単語同士の脚韻を $/e:/$ の具現形と見なし、さらに定説では中低母音に各方言で発達する古英語 $\bar{e}a$ と \bar{a}_1 を語源音として持つ単語同士の脚韻を $/e:/$ の具現形と見なす。念のため、古英語 \bar{e} と $\bar{e}a$ を語源音として持つ単語同士の脚韻も調べて、それぞれが中英語に至ってもおおむね別の音素となっていることを、脚韻を検索して調べておく。このような語源での幹母音を指定して検索するなどということは従来の研究方法や脚韻インデックスでは考えられていないが、音韻史研究を考慮して作成されている本コーパスであれば可能であり、それを図面を多用しつつ利用方法について紹介している。

このようにして収集された脚韻をもとに分析を進めた結果、古英語 \bar{a}_1 を語源音とする単語が別々の具現形を持つに至っていること、それらが同一の脚韻詩の中にも混在しており、複数の方言形が同一の脚韻詩に現れることが実際にあったことが示唆される。先行研究の前提は、中英語期のロンドン周辺で編纂された脚韻詩が「国王の元で既に標準化された英語発音」に基づいているという、多分に誤った固定観念に基づいている可能性が大いにあり、客観性に鑑みて疑問の余地があることが最後に示される。

第5章 これまでに作品別に編纂された脚韻インデックスは綴字を元に行っているものがほとんどで、音韻史の研究者には使いにくいものであった。まず単語及び形態論が区別される必要があるが、標準化されていない中英語の綴字は複数の単語が同一の綴字になっていたり、同一の単語が複数の綴字で書かれていたりといった状況で、文脈無しで意味情報を区別できるようにはなっていない。筆者のコーパスでは脚韻語の綴字に語源形を区別するタグが付いているほか、詳細情報として形態論等も入力されており、これらを利用して「単語」を区別することが可能である。そこで、新たにスクリプトを書き下ろし、同一のタグ・語源詳細情報をカテゴリ名（連想配列でのインデックス）とし、それが付与された脚韻語をまとめて同一カテゴリとして分類し、テキストファイルに出力することで語源情報で引ける脚

韻インデックスが生成できる。出力用プログラムはオプションを指定して出力の範囲を切り替えられるようになっており、出力を調整することで独自の脚韻インデックスをその時々々の要求に基づいて咲き雨声できるようになっている。

第6章 音韻史研究用コーパスは現在のところ筆者一人で開発しており、幾つかの問題を抱えながら進行させてきた。

1) 脚韻語には語源不詳のものもあり（現在全体の1割程度）、その分のデータの欠落はやむを得ないが、空欄の脚韻語を最小限に抑えるため、再建形や類推を語源とする語源情報も入れて検索可能にしている。2) 将来コーパスを公開することができれば、広い範囲から修正意見を集められることが期待される。語源音素記号の体系は、今後各言語（古英語、古仏語、中世オランダ語等）の専門研究者の検証を受ける必要がある。また、既に入力した語源情報も全ての情報源を網羅した結果ではなく、これらについての情報も得られることが望ましい。3) テキストデータは全て著作権法で保護されており、新たにコーパスを構築する際に許可を得る方法を確認しなければならない。また、それらをできればインターネット上で配布できればよいと思われるし、誤記情報を交換するサイトもあるべきであろう。

これらの問題点を解決していくことで、より可用性の高いコーパスとする努力が今後も求められる。

以上

論文審査の結果の要旨

本論文は、電子コーパスを用いた英語音韻史研究に関わる諸問題について考察し、効率的な研究方法を可能にするためのコーパスの構造と機能について具体的な提案を行っている。さらに、提案されたコーパスを実際に用いて、英語音韻史研究を行い、従来の説の不備を指摘し、本論文の提案するコーパスが音韻史研究のうえで効率的であるだけでなく、精度の高い研究を可能にするという点で有効であることを示している。

第一章は、脚韻詩の電子テキストに語源情報を付与して、英語音韻史研究を効率的に行うための電子コーパスの構造と機能について論じている。

第二章は、研究対象となる脚韻語の語源音価をタグ化することによって、語源音価を検索対象とすることができるようなコーパスの形式、タグ構造について考察している。

第三章は、それぞれの語源音価をどのようにタグに転写するかについて、古英語に入ってきた諸言語の音韻体系と関連付けて論じ、その方法を提案している。

第四章では、作成されたコーパスを利用して、実際に英語音韻史研究を行い、その有効性を実証している。具体的には、英語音韻史の $\overline{oe}i/$ として表記される古英語長母音音素の中英語での具現形について、従来の説の不備を指摘しているが、この不備の発見は、語源での母音を指定して検索することができる本論文が提案するコーパスによって始めて可能となったものである。

第五章では、本コーパスが、脚韻語に形態論、意味情報なども盛り込まれることにより、必要に応じた独自の脚韻インデックスが可能になっていることを論じている。

第六章は、全体としてのまとめである。

本論文の提案するコーパスがさらに精緻なものとなるためには、古英語のみならず、古フランス語、古北欧語等についての情報も組入れていく必要があり、その意味で、まだ完成されたコーパスというより、むしろ絶えず進化しつづけるコーパスであると言えよう。

とはいえ、本論文は英語音韻史研究を効率的にするだけでなく、さらに正確で精度の高い研究を可能にする電子コーパスの構造と機能について論じ、実際にコーパスを作成、提案し、その有効性を実証したという点で、その意義は大きい。以上により、審査委員会は本論文を言語文化学博士論文として十分に価値あるものと判定した。